

読書

江戸時代、美濃地方は蘭学に於ける大きな拠点の一つであり、著名な蘭学者を輩出している。

県図書館には彼らの著作のいくつかが残されており、その活躍の一端を知ることができる。

美濃蘭学の先駆けとなつたのは大垣藩医の江馬蘭斎(えま・らんさい)である。寛政七年(一七九五)年に彼が開いた蘭学塾からは、多くの人材が世に出ていった。『五液診法』(ごえきしんぽう)

県図書館に行こう

こんな情報が待っている

小森玄良(こもり・げんりょう)は、蘭学医として初めて宮中で診療したこと、優れた著訳書

は彼が翻訳した書物で、日本の内科診断学の発展に大きな影響を与えた。

代蘭法医の一人に数えられるほどの優れた医師であつた。また彼の塾からは緒方洪庵(おがた・こうあん)など優れた門

人が出ており、教育者としても手腕を認められてきた。彼の著した『診候大概』(じんこうたいが

い)は日本初の近代的な診断のための書物である。

宇田川榕庵(うだがわ

・ようあん)は、経文の

形を借りてわが国最初の

植物学入門書『西説苦多

ニ訶經』(ぼたにかきよ

う)を著し、また、本格

分類法による植物学書

『草木図説』(そうもく

ずせつ)を著わし、植物

的植物学書『理学入門

『植物啓原』(しょくがく

けいけん)三巻を

著した。この書にはツクバネやゴゼンタチバナなどの

植物画が美しい。

また、化学の分

野でも『含密開宗』

(せいみかいそう)

を著し、元素、水

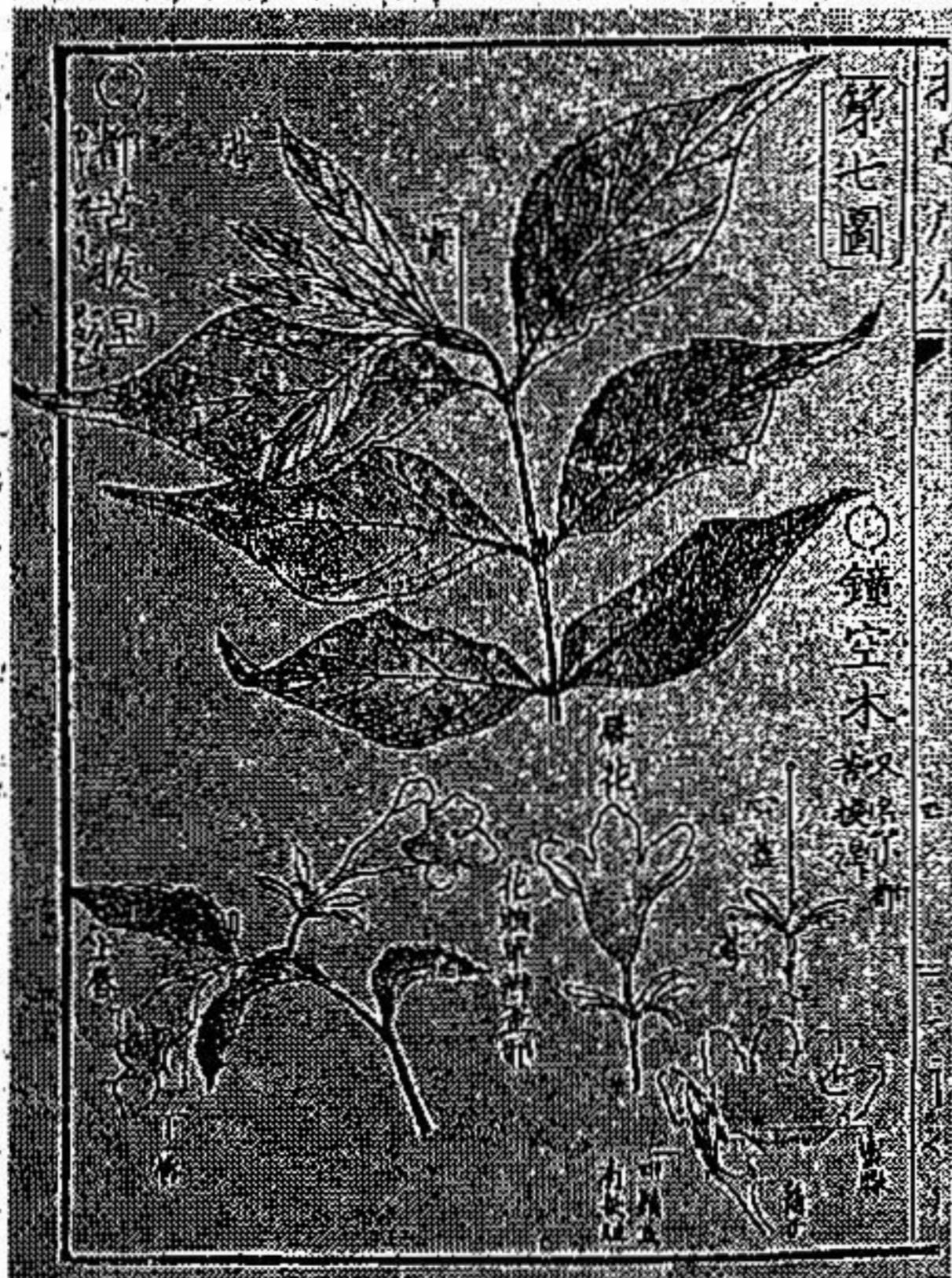
素、窒素、炭素な

ど現代でも使われ

ている化学用語を

美濃の蘭学書

医学や植物学に名著



宇田川榕庵著『植物啓原』の中の「ツクバネ」の図

考案出した。坪井信道(つよい・しのぶ)は、当時江戸三

BOOK REVIEW